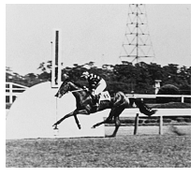
ムカシの競馬を読む



須田鷹雄（すだ たかお）
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第126回 10年・20年・30年前の2月

いまから10年前、平成18年の2月といえば、明け4歳のカネヒキリがフェブラリーSを制した月。勝ったカネヒキリは3馬身差の快勝だったが、2着馬も話題になっていた。平成18年2月20日付のデイリーから。

「届かなかった。打倒カネヒキリを目指したシーキングザダイヤだったが、3馬身差の完敗で2年連続2着。悲願のG1初制覇はならず、無念の7度目の銀に終わった」

このあとシーキングザダイヤはJBCクラシックとJCダートで2着を重ね、この年までに計9回のG1・2着という記録を樹立することになる。

一方、勝ったカネヒキリは勇躍ドバイへ……となるところだが、この年はぎりぎりまで渡航が決まらなかった。時間を遡るが、3日付の中日スポーツから。

「ハーツクライ、カネヒキリらのドバイ遠征がピンチに陥っている。ドバイ国際競走は3月25日にUAE・ナドアルシバ競馬場で行われるが、UAEで2年前の4月に発生した馬の伝染病『鼻疽』の影響で、遠征した場合、通常3週間の着地検疫が3ケ月間必要になることが判明。そうなると、春の競馬を全休せざるをえなくなるため、各陣営が出走に難色を示している(後略)」

フェブラリーSの時点でもこの問題は解決していなかったが、ぎりぎりになって通常通りの帰国検疫でよいということに。最終的には日本調教馬9頭が出走し、ハーツクライのドバイシーマクラシック優勝やユートピアのゴドルフィンマイル優勝に繋がった。

2月は調教師・騎手の引退があり競馬界としては節目の月だが、10年前の2月は大物調教師の勇退が多かった月だ。ナリタブライアンの大久保正陽師、エイシンプレストンの北橋修二師、さらに松田正弘、加藤修甫、中尾銑治、成宮明光、清水久雄、古賀一隆の各師もこのタイミングで勇退。勇退調教師のトータル勝ち星ということではこの年が一番多かったのではないだろうか。

騎手では松永幹夫現調教師が引退。最終騎乗はフィールドルージュの1000万条件平場で、見事1着。単勝は1.5倍の一本かぶりだった。最終騎乗ということを意識して買ったファンも多かっただろう。

ただ、惜別馬券がうまくいくことはなかなかない。この月は海の向こうでも名騎手が現役を終えている。3日付の日経夕刊から引用すると、

「北米最優秀騎手に7度も選出された米国の名手、ジェリー・ベイリーが1月28日、フロリダ州のガルフストリーム競馬場で最終騎乗を迎えたが、惜しくも2着に終わった」

この馬は単勝1.8倍だったそうだが、そうそう上手くはいかないものである。ベイリー騎手はその後、解説者として活躍している。

この月からはもうひとつ、JRAらしからぬ出来事をご紹介しよう。2月付のサンスポから。

「すでに死亡している馬が競走馬として登録されていた。JRAは1日、死亡していた馬を競走馬登録していたことを発表。問題の馬は美浦・斎藤宏厩舎のレモネードで、先月21日に美浦トレセンで死亡したが、26日になって競走馬登録されていた」

競走馬登録の部署と診療所で情報を共有できていなかったことが原因のようだが、完璧な役所のようなJRAでもたまにはこのようなことがあるようだ。ちなみに、登録料を返還し、登録前に死亡・退厩した扱いになったそうである。

続いていまから20年前、平成8年の2月。以前に紹介した、高速道路を走った馬＝スーパーオトメがデビューして大井競馬場は大騒ぎになっていた。2月4日付のサンスポから引用しよう。

「高速オトメ、スーパー人気～先月25日に首都高速を『爆走』して名を馳せたスーパーオトメが3日、東京・品川区の大井競馬場でデビューした。あおりぎみのスタートのため、結果は5着とふるわなかったが、単勝倍率2.1倍の断トツの1番人気で同競馬場関係者はホクホク顔。客席からは『これからも頑張れよ』と声援が飛んでいた」

このレースは第1レースだったのだが、単勝の売り上げが569万円。第2レースは67万円だったというから、500万円以上が「記念馬券」だったことになる。当時は車に当たらないお守りだなどと言われてもいた。

これでスーパーオトメが勝っていれば500万円ぶんの当たり馬券は退蔵されただろうが、結果は逆張りした馬券師の勝利。ニュースにはなったが、競馬場の実入りは限定的だったのではないだろうか。

ちなみに同じ日、宇都宮競馬場では明け3歳牝馬ナンバーワンと言われていたロマンリバーが放馬、車と接触して予後不良となっている。やはり放馬事故は持てはやすものではなく、起こらないにこしたことはない。

平成8年2月といえば、こんなこともあった。16日付の東スポから、まずさわりだけ引用すると、

「毎日新聞2月9日付が報じた、JRAの栗東トレセン『ダイオキシン汚染』事件が、妙な雲行きになってきた(後略)」

引用だけでいくと長くなるので要約するが、まず毎日新聞が、栗東トレセンのウッドチップコースから排出される水にダイオキシンが含まれていて河川を汚染していると報道。しかし調査した教授は直接サンプルを採取したのではなく、サンプルの出どころを巡る議論になった。いちばんやかましく議論されていたのが、引用記事が出たあたりのタイミングである。

調査委員会が設けられたが、当初報道された毒性の強い四塩化ダイオキシンは検出されず、人体に影響を与えるような汚染は無かった。しかし、最初に騒がれるときのインパクトのほうが大きいだけに、いまでも「トレセンからダイオキシンが出た」と誤解している人はいるだろう。報道の恐ろしいところである。

最後に30年前、昭和61年の2月から。先述したように10年前にはハーツクライが世界最高峰のレースを勝っているわけだが、そこから20年遡った昭和61年当時、「世界」というのは遠い遠い存在だった。そこへ挑もうとするシンボリルドルフ、というのが当時最大のニュースであり、ファンの関心事だった。

その様子を、昭和60年2月17日付の東京タイムスから引用しよう。

「16日午後、千葉県香取郡大栄町のシンボリ牧場で、『渡米壮行会』ともいえる皇帝シンボリルドルフの調教一般公開が行われた。晴天下、ルドルフとその牧場をひと目見ようと全国から集まったファンは2000人を超し大阪ナンバーを含めたマイカーざっと350台。家族連れ、ヤングを中心としたルドルフの熱狂的なファンが見納めになるかもしれない迫力満点の調教に思わずため息を漏らすシーンも見られ、約2時間の牧場見学を楽しんでいた」

外厩で公開調教をやって2000人集まるとは、当時の競馬ファンは熱かった。当日は京成成田空港駅と牧場の間に無料送迎バスをピストン運転させたというから、迎える側も訪れる側も熱かった。

人気のミスターシービー、実力のシンボリルドルフというように言われるが、ルドルフもまた、十分な人気を備えていたことが分かる。この米国遠征も色々とうまくいかないことが起きるのだが、それについてはまた号を改めてお送りしたい。

平成18年・東京競馬場
フェブラリーS
優勝馬：カネヒキリ

© JRA